

講演「地域の防災力を高める」（概要メモ）

講師：山崎 登 NHK解説主幹

「地域の防災力を高める～最近の地震取材から～」をテーマに、講演が行われました。講演内容は、阪神大震災及び新潟県中越地震の教訓に基づいたものとなっています。以下に、その概要を紹介します。

1. 未知の断層が動く

阪神大震災の後、主な 98 断層の地震予測をマップにしたことは一つの科学の成果であるが、鳥取県西部地震、新潟県西部地震、福岡県沖の地震など最近の地震は未知の断層で生じたものであること、まだわからないものが多くそのことを前提にすべきであることが指摘されました。

2. 阪神淡路大震災と新潟県中越地震

阪神大震災は都市の安全対策に課題を与えたこと、災害の規模が怖くなるくらい大きな規模であり衝撃であったこと、これを受け、都市の地震対策が積み上げられてきたが、新潟県中越地震が発生し、集落の孤立や高齢化など新たな課題が浮かび上がったことが紹介されました。

また、復旧工事についても、平地の都市部と違って、山古志村などの山間部では都市部と異なる状況にあることが指摘されました。

3. 建物の耐震化は阪神淡路大震災の最大の教訓

阪神大震災の際の死者は住宅の倒壊によるものが 83%であったこと、建物の耐震を強化すること、個人の住宅もある種の公共性があり、どのように耐震を強くするかが課題であることが述べられました。

4. 阪神淡路大震災の教訓

瓦礫の中から救出された 35,000 人の内、消防・警察・自衛隊によるものは 8,000 人、家族・近所が救出した人は 27,000 人であることが紹介され、災害は大きくなると防災機関の手に負えないことが指摘されました。

5. 新潟県中越地震の教訓

被災地の高齢化が進んでいること（山古志村 40%）、被災地では夜中のトイレの介護のボランティアが不足したことなど、高齢化社会における問題点が述べられました。

6. 高齢者の避難

これからの防災対策で高齢者の問題は欠くことのできないものであることが徳島県の山火事の際の特別養護老人ホームの事例で紹介されました。

7. 旧山古志村の高齢者対策

阪神大震災の際の仮設住宅問題が紹介され、高齢者優先としたため見ず知らずの高齢者が顔見知りのいないところでコミュニティを作らざるを得なかったこと、その後、自力再建できないお年寄りが公営住宅に入居する際にも同様のことを実施したため、地域のコミュニティが不足し、いわゆる孤独死の問題があったこと、これらの教訓を活かした取組みとして、山古志村では次の高齢者対策が実施されたことが紹介されました。

①同じ地区の人がまとまって生活、②家族単位を崩さない、③仮設住宅を元の村のようにする、これらにより高齢者が地域の人に囲まれて居ることができた。

8. 新潟県中越地震のもう一つの教訓

消防が搬送した負傷者を例に、家具が倒れなければケガ人ではなく助ける側に回れたことや日常の備えがいかに重要であるか等が紹介されました。

防災対策は難しいことだけでなく、思いついたこと、できることを一つでも実施することが重要であり、このことは国、自治体、地域、家庭でも同様であること等が指摘されました。また、地域の力を高めることが防災に繋がることも述べられました。

9. 最近の地震が教えたこと

- ①地震はどこでも起きること
- ②地域の力が防災に欠かせないこと
- ③普段が災害時に生きること

これらについて述べられると共に、NHKの地震時の災害報道の取組み（各放送局に地震計設置、スキップバック装置設置等）について紹介がなされました。